

「西南学院とチャペル」

出席者：泉 マス子氏（元大学文学部教授）
 伊原 幹治氏（高等学校教頭）
 土田 珠紀氏（早緑子供の園主任保育士）
 日高 利隆氏（元庶務課長・宗教部事務室主幹）
 安武 智里氏（元舞鶴幼稚園主任教諭）
 司 会：寺園 喜基 院長（大学神学部教授）

司会(寺園)：前回の座談会は「西南学院と宣教師」というテーマで行い、あわせて大学博物館の横に西南学院宣教師の記念碑も建てられました。今度は今年4月から大学新チャペルがオープンしましたので、西南学院の中心的なシンボルであるチャペルのお話を聞かせていただきたいと思います。学生時代に出席したチャペル、今度は自分が職場に身を置いて、子どもたち、学生生徒を導く立場でのチャペル、そういう関わり方もあると思います。それではまず初めに自己紹介を兼ねて、チャペルの思い出、最初に受けたチャペルの印象ということでお話をいただけたらと思います。

◇チャペル（学校・園の礼拝）の思い出

日高：私は2001年の3月に退職しましたが、約40年間西南にお世話になりました。私の場合は、いろいろな先生に助けられたというのが正直な気持ちです。中学部に入学したころは太平洋戦争が終わって、食べ物に苦勞する時代でした。西南に入学して毎日チャペルがありました。あの赤レンガのチャペルは、

今、大学の博物館になっています。まず、チャペルですが、最初はやはり姿勢正しく椅子に座りなさい、姿勢が悪い、と注意ばかり受けて苦痛でしたね。多くの学友がそういう時期を過ごしたのではないかなと思います。しかし、チャペルの内容は素晴らしく、外部からもいろいろな講師を呼んでいただきました。例えば当時のチャペルを設計したヴォーリズさん、世界的神学者のシュバイツァー博士、それから真珠湾攻撃の特攻隊長の淵田美津雄大佐。淵田大佐はアメリカで牧師をされているということでした。もうとにかく、多くの素晴らしい人たちの話が聴けました。これを私の小学校時代の友人は、西南は素晴らしいと言ってくれました。決して「教会へ行け」などと強制されませんでした。ただ、話しを聞いているうちに自然とそちらの方に向いてしまうような雰囲気がありました。チャペルはそういう空気、雰囲気に溢れていました。ですから姿勢が悪いとか何とか言われる前に、顔が自然と講師の方を向いて、失礼になってはいけないということが分かってきたんです。そういう意味で西南に入って良かったと感じて、西南でがんばろうというの

がチャペルの思い出でしたね。

土田：私は86期生で、西南の文学部児童教育学科を卒業後、早緑子供の園に保育士として就職しましたが、ちょうど清原選手と同期なので23年目になります（笑い）。今、主任保育士として勤務していますが、大学に入るまでずっと公立の学校だったので、キリスト教の学校というのは初めての体験でした。入学式の翌日にランキン・チャペルで児童教育学科の新入生が集められ、オリエンテーションがありました。いまだによく覚えています。その時に堺太郎先生が最初の礼拝の中で、「あなたたちは選ばれてここに来んです」とおっしゃったんです。みんな受験勉強して、合格して、という過程で西南学院大学に入学しているんだけど、「がんばったから」ではなくて、「選ばれた」と言われたのが、何か余計に西南にいることの意味を、大学に認められたというか、神様がちゃんとここに導いてくださったんだという使命感みたいなものを感じました。

ああ、そんな考え方をするのだと思ったことが、とても心に残っています。それが私とチャペルとの出会いであり、とても印象的でした。

安武：私は大学の児童教育学科に昇格する前の短期大学部児童教育科卒業で67期です。昔の高等学部だった建物が児童教育科の校舎になっていました。そして赤レンガにツタが絡まるチャペル、私はその建物が大好きでした。2階に上がる床の階段をみんなが歩くとギシギシ音がして、それが心地よかったですね。全員が集まっても150人でしたし、児童教育科は毎日チャペルがありました。卒業して42年ですが、同級生の印象もみんな同じで「一番大好きな時間だった」と言っています。講話は児童教育科の先生方なので、ひと月に何回も聞けたわけです。学生は声楽の授業がありましたし、みんな歌が上手で、讃美歌がきれいでした。チャペルは静かにお話を聞く楽しみの時間、ほっとする時間でした。それからチャペルで覚えているのは独特の匂いです。



当時暖房は石炭ストーブでしたので、20分ぐらいに1回かき混ぜないといけないのですが、その係をずっとやっていました。それで独特の匂いと讚美歌の歌声と、先生方の本当に熱心な思い、アットホームで何でも相談できる場だったと感謝しています。私は、卒業して2年ほど別の幼稚園に行きまして、その後、舞鶴幼稚園に37年間、子どもたちといっしょに学ぶ時を過ごさせていただきました。昨年の3月に定年退職をしました。今は自由な時間をどう使うか、感謝しながら毎日を送っております。

司会：どうもありがとうございます。
それでは伊原先生お願いします。

伊原：私は1965年に西南学院高等学校に入学しました。隣の県立高校に落ちて不本意入学でしたので、本当に西南に行くのは嫌でした（笑い）。この感じはしばらく抜けませんでした。ところがゲッセマネ会¹に入った。そういう意味ではチャペルを通してキリスト教と出会い、西南と出会い、教会と出会ったということでしょうか。その出会いが、私の人生を途中から大きく変えてしまいました。今は教員としてチャペルと関わっているわけですが、生徒として関わり、教員として関わるというのは、本当に幸せな歩みをしたのではないのかと思います。この座談会のために、他の先生にチャペルの印象を聞いてみたのですが、みんな違うんです。ですから、私は高等学校の代表ではなくて、単なる一個人としての発言であると理解してください。チャペルといえど何を思い出すかと尋

ねられたら、ツタの絡まる赤レンガのチャペル、中に入るとオイルの匂いがして…、そういう空間というのはまるで別世界で、それまでの私の経験になかった空間でした。それから赤レンガに白いペンキが塗られている木枠の窓。赤に白なんですね。あの上開きの窓²を開けると、キリキリと音がするんです。そんな話をすると、きりがありませんからこれくらいで…（笑い）。

泉：私が西南学院大学に奉職したのは1964年、東京オリンピックの年でした。その前にアメリカのテキサス州にあるベイラー大学に5年間在学しており、その間ずっとベイラー大学のチャペルに出席していました。あの頃は、ウェイコホールというイベントホールに3000人ぐらい毎回集まっていました。私は当時からクリスチャンでしたけれども、クラスメイトがチャペルに誘ってくれて、初めてチャペルに連れられて行きました。英語がよく分からない。何事が行われているかも分からない。ただ、讚美歌は知っていたので、いっしょに歌って、非常に荘厳な良い雰囲気浸っていました。それから時々日本に派遣された宣教師がアメリカに定期帰国して、チャペルの講師を務められたのですが、そういう時は何だか自分の親戚に会ったような気がして、非常に楽しみながらお話しを伺っていました。時々私にも英語が分からないなりに通訳などさせられたりして、非常に楽しく、荘厳でありながら心に染み入るような、チャペルと留学生生活を5年送ってきました。1964年に結婚することになって、私の夫が教養部³の

1 創立当初から続いている高校の宗教部のこと。
2 上下に開く窓。手を挟まないようにロープでつないでいる。
3 現在の国際文化学部の前身

教員でしたので、当時の古賀武夫学長に挨拶に行くので私を連れて行ってくれました。その時に古賀学長が、「あなた、アメリカで何してきたと？」と聞かれました（笑い）。ベイラー大学のチャペルの話をしたり、当時は語学教育に、教育工学というシステムが導入され、例えばLLなどがその分野なので、そういうことをお話ししたら、「じゃあ、明日から来てくれんかね」とおっしゃって、それで私の採用が決まったわけです。



司会：いい時代ですね（笑い）。

泉：いい時代でした。文学部にはクリスチャンの先生が多かったので、「泉さん、チャペル行こうよ」と誘われて、結局、約50年のチャペル生活を送りました。ミッションスクールというよりはチャペル。そういうところにいつも自分の居場所を与えられて過ごしてきたと思います。退職してからももう10年経ちますけれども、やはりチャペルとの関係は切っても切れない、そういう状況の中で、感謝しながら生活しています。

司会：どうもありがとうございました。

では最後に私も自己紹介をしたいと思います。私は高校を卒業して神学部に入りました。最初の2年間は教養課程でしたので西新キャンパスで授業を受けて、こちらのチャペルに出席しました。そして3年生以降は、専攻科まで干隈キャンパスで神学部独自のチャペルが毎日行われていましたので、そちらの方の印象が強いですね。神学部でのチャペルというのは神学部の先生が主に話されますけれども、神学生たちも説教練習を含めて話をする機会があり、それなりの緊張がありました。西新キャンパス、ランキン・チャペル⁴でのチャペルというのは、大学の先生が講師をする場合がほとんどだったように記憶しています。最近では外部の講師が多いのですが、その頃はあまりなかった。外部の講師も教会の牧師ぐらいで、良いか悪いかはともかく、多様な人材ということではなかったと思います。そして私は、ギャロット先生がチャペルでよく、使命感を持った生き方をしなさい、ということを繰り返して言っておられたという印象があります。そして本当に使命感を持った生き方ということ、若い魂に叩き込まれたという感じがします。

◇心に残るメッセージ

司会：初めにみなさんのチャペルの思い出を語っていただいたのですが、次に心に残るメッセージ、聖句や讃美歌などがありましたら、お話しください。

日高：実は、今日お集まりの皆さんのい

4 米国南部バプテスト連盟外国伝道局の全額補助を得て建てられた。名称は、西南学院の発展のため、物心両面において支援尽力した同連盟総主事 M. T. ランキン氏に由来している。2006年9月に取り壊され、現在は2008年4月に新しいチャペルとして生まれ変わった。

ろいろな話を聞くと、確かにチャペルの思い出は個人差があるようです。時代背景にもよりますけど、今、司会の寺園先生は学内の講師とおっしゃっていましたが、私の場合は逆に外部の講師から、素晴らしい話を聞いたという印象が強いです。何もない、殺伐としたそういう時代に中学生として西南のチャペルで有意義な講話を聞くことが、食べ物と同等の力を与えてくれたのではないかと思います。



司会：土田先生はどうですか。

土田：先ほど安武先生が、学生の時に讃美歌を歌うのが好きだったというお話をされましたけれども、やはりチャペルに行っているいろいろな先生の話聞くのはもちろんですが、必ず歌うという、そこから入る、そこが何か、チャペルの一つの大きな役割と言いますか、入り方の開かれた部分じゃないかと思っています。

安武：礼拝の思い出というと、舞鶴幼稚園では子どもたちは3歳で入園してきます。最初に出会ったのが「神様は愛です」という聖句です。でも、3歳の子どもには何のことか分からないんですね。私も子どもたちは神様をどういうふうに受け止めているのだろうか

ずっと考えていました。私が受け持った3歳の女の子でしたが、ある日礼拝中「先生、神様の名前って知ってる？」と聞くんですね（笑い）。何て言うのが一番教師らしいかなと思って答えに困ってました。そしたら、「あいちゃんよ」と言うんですね。「神様は愛です」を毎朝友だちと唱えながら考えていたのでしょうか。自分には姓と名があるから「神様はあいちゃんって言うんだよ」と。あまりに素敵な子どものひらめきに思わず抱きしめてしまいました。当時、指導を受けた音楽の安田ヤス先生にその話をしたら、素敵なメロディーを付けてくださいました。その子も今は金沢の幼稚園の先生になっています。教師冥利に尽きます。

司会：今、安武先生が「教師冥利に尽きる」と話されましたけど、チャペルを催す側としての良かった点、またこれはまずかったという、そういう体験などありましたら、お聞かせ願いたいと思います。今、毎日中高のチャペルを催すという立場から伊原先生はどうですか。

伊原：来年度本校を受験する中学校の保護者の方々が学校見学に今年だけで17、18校ぐらい来られて、その案内役が教頭の仕事なのです。教育内容や施設を紹介して最後にチャペルに案内するのですが、そこに座っていただいて「チャペルはこんな場所で、他の私立や公立の学校にはないものです」、「結婚式場ではありません」と冗談を言ったりしながら説明するわけです。先日、西区の小戸公園で母親がわが子を殺害するという事件があり、その地元の保護者の方たちが来られました。その時に、普段どおりの説明しようと思っておりましたが、でもやはりこの事件に触れな

いわけにはいかないだろうと思いました。生命の問題なのです。つまり、キリスト教にとって生命の問題というのは中心的な問題で、今の世の中に殺人事件が多く起こっています。そこをキリスト教はどう考えるのかということです。「なぜ人の生命を奪ってはいけないのか」と問われた時に、一般的になかなか答えるのが難しい。本当に答えにくいわけです。保護者の方々には「人間の生命は我々が神様から与えられたもので、言わば一時的にお預かりしたようなものですから、もちろん自分の生命であっても自由に出来ないものです。それが基本的に西南の持っている考え方だと思います」と答えました。それまでは、ざわついた感じがありましたが、この時は非常にきちんと聞いていただきました。このような問題で相手の心にストレートに切り込んでいけるというのは、西南のいいところじゃないかと思います。他の学校だったら絶対出来ないわけですね。

司会：それと同じようなことを明治学院の久世院長からも聞いたことがあります。他校の先生から「キリスト教学校は良いですね。他の学校では言えないようなことも言えるから」と言われました。例えば神は愛であるとか、命は大事だということを、普通はなかなかストレートには言いにくいけれども、特にチャペルなんかはそういうことを言わないとチャペルにならない、という点がありますからね。

◇チャペルに来た著名人

司会：泉先生は、去年もチャペルに来ていただいて講話してくださいましたが、学外からも神学者や作家などと呼んでチャペルで講話してもらうことがあります。そのような著名人について、特に印象的なお話はありませんか。

泉：実はもうずいぶん前になりますけれども、ノートルダム学院の渡辺和子先生が「ご大切の愛」というお話をなさったことがあります。宣教師が日本に入り始めた16世紀頃、「神は愛である」という言葉がなかなか翻訳できなかった。そこでポルトガル語の辞書に初めて「愛」という言葉が出てきて、そこには「ご大切」と書いてあったとそういうような話でした。後に私はそれをゼミの材料にして、学生たちとディスカッションもしました。渡辺先生の特別伝道週間のお話は、ゼミの学生だけではなく、私が勧めた他学部の学生たちが聞いて、感激をして涙を流したと言っていました。これが一つの西南チャペルの良い思い出として残っています。それから、思い出に残ったと言えば、作家の曾野綾子さんが来られました。あの方の知名度、著書、そういうものに影響されて、学生がランキン・チャペルにいっぱい通路も学生が座っていました。何を話されたかというのと、「死に至る生」とか、「生と死の関係」、これは当時としては珍しいテーマで新鮮だったなという記憶があります。ただその時の出席率の良さに圧倒されて、話の内容はあまり覚えていませんが…（笑い）。それからもう一つ。これは当時香港バプテスト

大学の学長をしておられる謝志偉先生、実はベイラー時代の同級生で科学の専攻でした。やはり科学者だけに、普通に見る目ではなくて、もっと違ったディメンションから聖書を読み、神様を信仰すれば良いのではないかというお話でした。もう一つ良いですか。ドイツ文学の小塩節先生。

司会：今はフェリス女学院の理事長をしておられます。

泉：そうですね。この先生がモーツァルトやシューベルト、その他いろいろなヨーロッパの音楽家、作詞家、作家に詳しい方で、非常に面白いお話をしてくださいました。お話しもさることながら、バリトンの朗々とした声で叙事詩を読まれたり、歌ったりされました。これは非常に印象深く思い出に残っています。小塩先生の話になると、すぐにあの時の朗々たるバリトンを思い出します。楽しい思い出でした。

司会：神学部のチャペルでゲストといいますと、外国から有名な神学者がたくさん来校されています。ざっと名前を挙げるだけでもアルベルト・シュバイツァー。それからカール・バルトの長男のマルクス・バルト。それからバル

トの弟子のブッシュ、クラッパート。それからエーミル・ブルンナーなど、そういう人たちが神学部のチャペルにきました。ランキン・チャペルの方では作家の大江健三郎さんも来られたんですね。

日高：学研所長と二人で空港まで迎えに行きましたが、あの時もチャペルが多かったですね。

司会：先ほど先生方のお話の中で、音楽や歌が果たす役割というのは、幼稚園や保育所では非常に大きいと思いました。中高生の方は讃美歌であり声が出ないので、指導の先生がもっと大きな声と言いますが、中学生などは、たぶん歌うことよりも言葉の方に思考の重点が移る過渡期だと思うんです。しかしこの保育所・幼稚園・小学校の時期というのは言葉よりもっと歌とか動作とか、そういうことがチャペルで大切なことになるのだらうなと思いました。ですからチャペルの意義は、「言葉をもらう」という言葉があるけれども、歌をもらうというか歌を歌って讃美するとか、そういうのも大きいだらうと思いますが、そのあたり具体的に何かもう少し話をしていただける



とありがたいと思います。

土田：以前、坂本献牧師のお子さんをお預かりしていた時期に、月に一回、坂本先生にいらしていただいていた。私たち保育士としては講師をお迎えして子どもたちにおとなしくお話を聞くよう非常に気を使いますが、そのような気遣いは全く必要なく、たくさん歌ったり、踊ったり、すごく楽しかったんですね。音楽とは楽しいもので、そこから始まり神様の言葉を曲にのせて歌うことは、子どもたちにとってもごく自然で楽しいことだと教えられました。それから保護者の方が早緑の入園式で、最初に讃美歌を歌うという時に、本当に懐かしいと言われます。キリスト教系の幼稚園卒園生で、これまでは何十年も全然触れていなかったのに、あの時の気持ちを思い出したとか、あの雰囲気がとてもよかったとか、よくそういう感想を保護者の方からはお聞きします。そういう音楽から感じられることというのは、子どもも大人も同じだなと思いますね。

司会：安武先生はどうですか。ご自身もよく歌を歌われると思いますが。



安武 智里氏

安武：私も子どもも大人も同じだなと思います。クリスマスの降誕劇の中で23

曲ほど歌います。その年によって選曲を変えていくつもりではありますけれども、やはり変え難い歌が何曲かあるんですね。舞鶴は、親子三代OB・OGもいれば、親子二代というのはそれほど珍しくありません。それで自分が舞鶴にいた時も歌ったということで、あれは原点回帰というんでしょうか、その歌になるとそこだけ大きな声で、本当にもう周りもつられて歌ってしまうんです。だから良い歌は古くならないんだと思います。また、歌と言えども何年前になりますか、広く市民にも開かれたチャペルでアメリカからゴスペルグループの来日公演がありました。その時に私は何度も「子どもも行っていいですか」と確認して参加の許可を得ました。その時はおそらくおとなしい子等を宗教局の方は予想されたかもしれませんが…。それで園として非常警戒態勢を取り、教師たちもその日は早くからランキン・チャペルに行って、子どもたちが会場の雰囲気を壊さないように気をつけました。とにかく3歳から6歳の一番元気どころが20人くらい行きましたが、最初わりと静かな歌だったのにアメリカの方はのせるのが上手ですよ。やがて子どもたちは、手招きされステージに何人か登ったと思いますが、リズムに合わせ楽しそうに跳ねるのです。その間冷汗でしたが（笑い）、会場は大いに盛り上がりました。その子どもたちが帰る時に「イエス様のこと歌ってたんだよね」、「上手だったね」「英語で歌ってたね」と喜んで言うんです。「どうだった？」と聞くと「うん、楽しかった。イエス様カムカムでしょ！」と言うんですね。その音楽会の主旨を一番享受したのではないかと思います。

幼いうちにキリストを覚えるというのは確かだと思います。

司会：中高でチャペルと音楽というと、吹奏楽部や弦楽部などが演奏する機会がありますが、その結び付きはどのようなのですか。



司会 寺園 喜基 院長

伊原：そうですね。今でも中高のチャペルでは讃美歌を歌わせるのに苦労します。また、そういう私たち自身もよく怒られました。昔、宗教主任の清水実先生が聖書か讃美歌か忘れましたが、あれで生徒の頭をバシバシ叩いていたのを今でもよく覚えています（笑）。C.K.ドージャー先生も壇上から見張っていて、態度が悪い生徒を怒っていたと言われます。中高生とはそんなものではないでしょうか。

日高：ご子息のエドウィン先生になると全然それはなかったですね。それからギャロット先生もどちらかというと、真正面から話す人ではなく、手をお尻につけたようにして斜めになって話していました。そういう意味では、ちょっとお行儀が悪かった（笑）。

司会：私は木村文太郎先生から影響を受けましたが、あの先生は最初に「今朝は三つお話しします」と言って話を始められました。その方が印象に残りや

すい感じがして私も取り入れています。伊原：木村先生は、きちんと起承転結が決まっていた。とても聞きやすかったですね。

◇チャペルの本質・意義

司会：卒業生の皆さんに聞くと、チャペルが良かったとか、讃美歌を今も歌いますなどという声をよく聞きます。現役の生徒や学生には評判は悪いかもしれないけれども、後から思い返してみると、「あの話は良かった」、「あれは大事だったし、今でも大事だ」ということがチャペルにはあるように思います。そこでチャペルの本質・意義はどこにあるのか考えてみたいと思います。歌を歌うこと。人生を考えること。生と死を考えること。神の愛を考えること。などいろいろあると思うし、若い魂にはなかなか届かないかもしれないけれども、だからといって投げかけないのではなくて、投げかけていたものが卒業して、しばらくしてから芽生えるということもあると思います。チャペルは人気がないから止めるというのではなく、大切なものですから守るという姿勢があるように思えるのですが、今後の西南学院のチャペルの在り方を聞かせてくださいませんか。

伊原：今年、教育に関するある会議があって、その委員に選ばれました。答申案を検討していく中で、絶対これは答申案に反映されないだろうなと思いましたが、本当に今の時代、生命の問題が一番大切だと思ったのです。宗教教育じゃないかと思ったのです。生命の問題に触れようと思うと、これは宗教という切り口以外では触れられない。だからこういう場所では言わないでお

こうかと思ったのですが、やはり言わずにはいられなかったんです。それを何人かの方が支持してくれましたけども、残念ながら答申書には「宗教」の「し」の字も出ていなかったですね。

司会：やはり死生観の問題ですか。

伊原：そうです。やはり宗教教育が大切だと思います。チャペルまたは「聖書」という授業があるわけですけども、そういうものを通して、生命の教育ができるということです。そこがますます大切になってきた。これまで以上に大切になってきたと思います。ですからもっと正面に据えていく、そういう姿勢が本当に必要なのではないかと考えています。



泉：西南のチャペルやキリスト教学は、その中にいる時は「つまらない」と言う学生もいますが、そう言いながら心の中にはキリスト教的な考え方が、必ず植えつけられていると思うんです。「神は愛なり」とか「自分を愛するよに隣人を愛せよ」というようなあの聖句は、彼らが何か悩み事や壁にぶつかった時にふっと出てくるのではないだろうかと思います。社会に出て悩みや不安の中で、本当に疲れ果てている人がいますが、その時にチャペルで聞

いた講話やキリスト教学で受けた講義が、なんとなく蘇ってくるということを卒業生がよく言っています。それで、卒業して何年か経って、何か真実のものが欲しいと思った時に、やはりチャペルが思い出されるのではないかと考えています。

日高：私も泉先生と全く同感です。卒業して同窓会などで話をする時に、あれだけチャペルを怠けて休んでいた者たちが、同窓会で言うことは、全く逆のことを言っているんですね。「チャペルを怠けずに、話をきちんと聞けば良かった」ということを口にしてしています。それは何かと言いますと、一般世間では教育対象にされず、西南であって初めて教育されるその内容が、卒業後、どこかにこびりついているということがあるのではないのでしょうか。決して無意味ではない。私は定年退職して8年になりますけども、やはり中高の同窓会というのは、案内状を見ると、なんとなくチャペルで慣れ親しんだプログラムが入っているんです。なぜこういうものがあるのかな、教会にも行かずチャペルもサボったあいつが、と思うんですけども、やはり教育にはそれなりに時間がかかるものだということですから、今以上に厳しく教育をなさっていただいてもいいのではないかと考えています。

◇100周年以降のチャペルあり方

司会：最後に西南学院もあと7年で創立100周年を迎えますが、100周年以降のチャペルのあり方についてお考えがありましたらお願いします。

泉：西南には立派なパイプオルガンがありますので、その演奏と講話というの

をいつも合体させてチャペルができれば良いと思います。こういうものを地元のテレビ局と提携して、もっと開かれたチャペルにすればどうだろうかと考えます。バイラー大学ではそういう事をやっておりました。国際交流というのをわりに西南は早くから取り入れていますね。やはり国際交流の中でチャペルをどのように持つかというようなことも、西南に留学して来たノンクリスチャンの学生たちも対象を考えて、ある程度教育する必要があるのではないか、という気がしています。私も留学生別科で教えていたことがあり、チャペルに留学生を誘って行くのですが「日本語が分からないから」と言って、参加しない学生がいます。分からないなりにそういうプログラムを持って、しかもそれをローカルに放映しても良いのではないかというような気がしていますね。

司会：西南学院にFMラジオ局を作らないかという話がありました。アメリカの大学はFM局を持っていると先生がおっしゃっていましたよね。

泉：テレビ局も持っていて、狭い範囲ですけれども、放映しています。

司会：西南のチャペルを放映するとか、そのようなことを考えられたらいいですね。

泉：これはやはり、開かれたチャペルということになるのではないかと思います。

伊原：先ほど土田先生が最初に言われた「あなた方が西南を選んだのではない。あなたたちは選ばれて来たんだ」というフレーズは高等学校の入学式で必ず校長が語る内容です。生徒はそのフレーズをよく覚えています。本当によく覚えている。初めてキリスト教に触

れる体験をした時に、投げかけられた印象的な言葉ですが、入学式以外ではほとんど語られない。それが卒業を前に『遙けきかな』という年刊誌を出していますが、非常に印象的だったと3年生が書いています。自分が卒業する時点で、西南に選ばれたんだとしか言えないというか、そう確信するに至ったというか、そういう自分なりの体験を何人かの生徒が書くんです。そういう意味で、「神様が選ぶ」という、他校では全くない経験ですが、そういう言葉というのはチャペルでしか聞けないと思いますし、一度聞いた時になかなか忘れられないもので、そういうものがずっと残るのでしょうか。また今年も卒業生が同じ事を言っているなど思いながら読んでいます（笑い）。

司会：西南 OB で文学者の原田種夫さんは旧制中学部の卒業生ですが、修猷館を3回くらい受験している。算数が全然ダメでどうしようかと思ったそうです。仕方がないから西南に入ったところ、やはり彼は入学式の時にドージャー先生が同じように言うのを聞いて、最初は腹を立てたけれども、卒業の時には納得して卒業したと、西南新聞にも書いています。そういう言葉というのは、今でも生きているのかもしれないですね。幼稚園や保育所でチャペルの本質、あるいは今後のチャペルの守り方ということを考えて、何かありますか。

土田：早緑の子どもたちで保育時間が長い子は12時間ぐらい園で過ごしますので、たくさんの人やものと関わって、いろいろ刺激を受けて良い影響があるけれども、とても疲れるんですね。頭も体も心も。そういう時に、必ず園児はお昼寝をしますが、もちろん疲れを



土田 珠紀氏

癒す意味もあるでしょうけれども、その時間だけは自分に向き合って、今まで外に向いていたエネルギーが自分に向いて来る、そういう時間だと感じています。例えばそれが大学生になると、いろいろな悩みや不安があると思うのですが、チャペルに足を運ぶことで、その時間は「讃美歌が楽しい」でもいいし、「この話は難しいなあ」でもいいし、どう感じるかはその人の自由であって、自分で自分のことを考えられる時間が与えられます。ノンクリスチャンの学生さんにも、自分と他のものとの関係などを考える1つのきっかけになるのではないかと思います。チャペルはそんな存在であることに大きな意味があるのではないのでしょうか。それから早緑の3月の聖句は「私はあなたがどこに行ってもあなたを守る」という聖句を選んでいきます。例えば赤ちゃんが生まれて、母子関係がしっかりできて、愛着関係が育つと、それを「心の基地」にして冒険し、探索する。そしてまたお母さんのところに戻って来る。そういう安心、心の基地があって、外に向いて行くという、何かその当たり前前の愛着行動、人間の大事な愛情の元に成り立つことができるような気がします。私は、この聖句と子どもた

ちの姿とキリスト教というものが、とても繋がって感じられます。チャペルは、安心して神様のお話を聞き、自分自身に向き合い、心の力をつけていくようなそういうところであってほしいと思います。

司会：本当にそうですね。ありがとうございました。安武先生どうぞ。

安武：若い人たちはやはり求めていると思います。自分がどの道に進むのか、自分が何をしようとしているのかといういろいろなところで悩んで模索しているんですね。チャペルは、家庭の代わりはできないけれど、やはり発信基地であってほしいと思います。すぐには答えにならないだろうけれど、チャペルでの話のひとつひとつが心の種になって、その種が実になるまでは時間がかかります。けれども、たとえ独りになってでもチャペルというのは常に利用されて、居心地の良い場所であり、きれいなハーモニーが聞こえてくるところであり、誰かが優しい声で語りかけてくれる、そういう場所であるということが大事なのではないのでしょうか。こういう話があります。舞鶴には創立以来、父母礼拝というのが続いていて、園長や鳥飼教会の牧師先生が礼拝を守りに週に1回来てくださっています。今は毎週約20人の父母が自ら集まるのですが、それがあある年いろいろな事情があり、参加者がたった1人の時がありました。約30年前のことです。当時園長を兼務しておられた村上寅次先生は、たった1人のために、本当にお忙しい公務があつたけれども、その時間を決して休まらなかったんですね。必ずそこに来て、その人と向かい合って、1時間をしっかり過ごされましたが、それが半年ぐらい続きました。それで、

「どうですか」とたった1人で参加しているお母さんに聞くと「自分が生きてきた中で本当に一番満たされた時間です。私の一番大切な時間です」とおっしゃったのです。ご自身が舞鶴の卒業生ということもあるでしょうけど…。自分の生き方を探る学生のために、自らが歩み入る場が常に西南にはチャペルという形で備わっている。人数を競い合うのではなく、「いつでもあなたのために用意されている」ということを主催する側が心掛けていくことが大事なことはないかと思えます。

司会：そうですね。こちら側の心構えも大切ですね。ありがとうございます。もうそろそろ終わりの時間ですが、最後に、これは言っておきたいというものがありましたら、自由に発言してください。

土田：最後に一つ。今年度、小学校開校の関係で、ワーキングチームの中高の先生方と話をする機会を持ったのですが、その時に1から10まで話さなくても共通する子ども観、教育観というのがあって不思議な安心感を覚えました。私たちは子どもたちの5年後、10年後の姿を考えながら、毎日保育をしています。中高や大学の先生方も子どもたちが育ってきた歴史や背景など、お互い上を見たり、下を見たりというようなことは、とても大事なことだと思います。2010年に小学校も開校すれば全部が繋がることになりましたが、西南学院の中で宗教教育というものは、どの学校・園にも繋がっているものなので、具体的には分からないけれども、現場の先生方や保育士などの、教育・

保育の基本的な部分で話をしたり見学し合うなど、そういう機会があるというのは西南学院としてとても大事なことではないかなと思っています。

司会：現在、全学院の学院宗教委員会というのがありますが、いろいろなレベルで交流ができると良いですね。

伊原：私も一つだけ。コミュニティクリスマス⁶というのは市民や地域の方々に開いたチャペルだと思いますが、そういう意味でちょっと違うチャペルだろうと思います。以前から中高のチャペルを会場として使っていただいていますけど、いつもとちょっと違う雰囲気だと思います。そういう意味では、新しい可能性として、これから大事にしていけば良いのではないかと思います。

司会：そういう意味では、全教職員の礼拝として、教職員のクリスマス礼拝や創立記念日の礼拝などがあるんでしょうね。

今日は建学の精神を一番体現しているチャペルについて「西南学院とチャペル」というテーマで語っていただきました。個人的な思い出あるいはそれぞれの若い頃や職場としての思い出、さらにチャペルの本質論に至るまで、いろいろご意見をお伺いすることができて、大変ありがとうございます。今後とも、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

■この座談会は、2008(平成20)年10月3日、西南クロスプラザ2階ゲストルームで実施されたものです。

6 1993年に「西南学院市民クリスマス」という名称で初めて開催され、現在は「西南学院コミュニティクリスマス」として定着した。